

今から約 1,100 年前、貞観 11 年 5 月（西暦 869 年 7 月）に発生した大地震と、次いで押し寄せた津波の襲来が破局的な被災と犠牲者を出しました。この惨禍は教訓として伝承されて来ておりました。しかし、やがて起りうると予測されていた事態が、文明、文化そして科学も進歩し 1,100 年前とは比較にならない発展をした現代に、3 月 11 日の東日本大震災の瞬間、天変地異が起り、怒涛の勢いと猛威で私たちに襲いかかりました。なすすべもなく、ただ呆然とし自然に対する人間の無力さをしみじみ痛感いたしました。一瞬にして全てを失い、日常生活は混乱と混迷で一変してしまいました。

以来、早くも半年を過ぎましたが、現状の復旧・復興は進みつつも遅々とし、被災規模が大きく、その緒についてという状況であります。当初から、学園・校友会本部には迅速なご配慮をご支援として、お見舞金や義援金を頂戴いたしました。他県の校友会の皆さんや陸上競技部 OB・BG 会からもお見舞金や心温まるご支援、励ましのお言葉を沢山いただき、感激し、私たちに勇気と希望を与えていただきました。

私たち、多くの校友は被災者でありながら、かつ災害復旧・復興の第一線で活躍している人たちでもあります。それぞれの立場で全力つくして復旧・復興に取り組んでおります。

校友会活動も、この混乱の中では身動きも出来ず機能の停滞をよぎなくされていて、気が気でありませんでした。そんな中でも、[当校友会役員の結果と献身的な協力を得て](#)、県内校友の安否確認など徐々に進められ義援金の配分も実施することが出来ました。

義援金を受け取られた多くの校友からは、感謝と御礼のお手紙や驚きと立命館・校友会への再認識の思いを書き綴った内容のものも頂きました。本当に良かったとつくづく思っております。

インフラの中でも、とりわけ交通網の復旧に手間取っている状況でした。学園・校友会本部の真剣で真摯な取り組みや幹部・スタッフの精力的現地支援の来訪に心を打たれました。

震災が大学との距離を身近なものにし、勇気づけられ一層の信頼関係を築くことができたこと感謝致しております。誠意にお応えする為にも、現地校友と相互の信頼の絆を太くし、その為に何が出来るのか、役員一同試行錯誤しながらも努力を致したいと考えております。

広大で広域な被災・被害をもたらした東日本大震災は三県に止まらず、国内外に大きな影響をもたらしました。遅しく復旧・復興そして復活に立ち向かっている校友に会うとき、気の遠くなるような時を要することを覚悟し、未来に向かい明るく元気で突き進む姿に希望と発展を信じております。

千年に一度と言う貴重な経験は、千載一遇の糧とし、立命館大学ならびに校友会発展と、校友相互のネットワークの絆を強めるために活かして行きたいと思っております。

最後に、重ねて学園・校友会本部ならびに全国の校友の皆様へ深く御礼と感謝を申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。

2011 年 9 月 27 日

立命館大学宮城県校友会  
会長 下村 泰雄